

小樽高商の先生たち

倉 田 稔

目 次

はじめに

- 1 ダニエル・ブルック・マッキンノン
- 2 ニカライー・アレクサンドロヴィチ・ニェフスキー
- 3 大熊 信行
- 4 伴 房次郎
- 5 ルイス・フーゴー・フランク
- 6 ジョー・アルベール・デーゲン

はじめに

ここでは小樽高等商業学校（以下、小樽高商と略す）の6人の先生を個別に紹介する。同時にこれは小林多喜二伝の一部である。多喜二伝は、「第1部少年時代」を、すでに『人文研究』第86輯、および第87輯、に載せた。86輯は小学校時代前半、87輯は小学校時代後半および庁商時代前半である。予定している庁商時代後半は、『人文研究』88輯に載せるはずである。なお、「小樽高等商業学校と渡辺龍聖」は、『商学討究』第44巻4号に載せた。本稿はその継続であり、多喜二伝（6）にあたるものである。

1 ダニエル・ブルック・マッキンノン

高商の英会話の先生の1人は、マッキンノン (McKinnon) である。息子

さんの発音によればマッキノンと聞こえる、しかし言いふるされているように書く。彼は、大正6年から昭和16年12月8日まで高商で教えた。小林多喜二も彼に英会話を教わった。

マッキンノンは、1890年にアメリカのボストン市に生まれ、ハーヴァード大学で古典学を学び、1914年に卒業して、同年すぐ日本に来た。山口県長府の豊浦中学で教えた。このころは、日本が「お雇い外国人教師」を求め始めた時代であった。彼は、日本人・三島家の秦子（しんこ）と結婚した。三島家は武家であった。彼女はクリスチャンであった。そして3児をもうけた。長女ベティー（エリザベス）、次女リンコナ、長男リチャードである。マッキンノンは、一度アメリカへ戻り、カリフォルニア州大学で修士号をとり、小樽高商の渡辺校長に呼ばれていたので、1917年に小樽へ来た。

彼はこの上なく小樽を愛していた。ロバに3人の子供を乗せて小樽の街を散策して、有名だった。日曜日には家族そろってロバにまたがり、公園を散歩した。だから町では、「ロバ先生」と言われ慕われた。このロバの剝製の一つは、子供たちが通学した小樽市立緑小学校（現）に、今もある。

マッキンノンは、当時、「丸顔、色白で、口髭を立て、男ざかりの美しい男性」だった。¹⁾

彼は英語を問答法で教えた。伊藤整と同じ卒業生の1人が、彼について英語でこう書いている。意識しておこう。

「彼は良いところが沢山あった。自分の義務に忠実だったことが一番いいところだった。いわずもがな、彼が全く休まなかったことは、律儀である証拠である。反対に、他の教師たちはどんなにか授業をしなかった。彼の教え方はなんと効果的だったか。なぜそうだったのか？ 教科書も講述もしなかったからだ。教師が教科書を使えば、講義は無視される。講述に頼れば、生徒は口述を筆記しなければならない。そうなれば、教師は再生音機そのものとなり、生徒は記録機械である。マッキンノン氏は、利口だったので、問答法を用いた。問

1) 『伊藤整全集』第20巻 筑摩書店 402ページ

答法をすれば、生徒は教師の言ったことを無視できないし、生徒はノートをとる必要はない。これは教師と生徒の間に愛情を生む、問答方法そのものだ。無視もされず、愛情があって、教育効果は作られる。たしかにマッキンノン氏はこのような理想的な授業をやってみせた。その理想的な授業をするために、彼はまず第一に独自の授業計画を念入りにつくった。それには、日本人生徒に有用で「間違いやすい表現」が集められた。第2にこんなうまい授業計画に加えて、彼はそれをとてもうまく行った。結論として、彼の授業のやり方は、いつも生き生きしていて、面白く、魅力的だったのだ。素敵な教え方のために、私はいつも彼の授業が面白かった。発音が大切だと強調する彼の話を実況しよう。日本でアイス・クリームは、I scream と聞こえる、というのだった。」²⁾ 彼にはマーク・トウェイン流のユーモアがあった。

高商の臨時教員養成所では、集中的に英語が教えられた。

マッキンノンはナイフ・フォーク一式を持参し、洋食の食べ方を教えたりした。伊藤整は言う。「マッキンノン先生が初めて私のクラスに来」たとき、「五十人くらいの生徒を前に お皿やスプーンやフォークをたくさん持ってきて先生の卓上に置いて、深い皿、浅い皿をみんな広げて、西洋の食事の食べ方を教えます。」「これは一九二五年ごろのことで、北海道のいなかの町の少年の私なんかそういうものは食べたこともないんです。」だから「非常に心強いことで、一生懸命見て覚えようとした。」その次の時間に、マッキンノンは「黒板にチョークで裸の女の人形を描いた。これはえらいことになったと思って見えていますと、それに下着をだんだん着せていきまして、スカートを着け上着をつける。そして西洋の女性の着物はこういうふうになっています」と教えた。「そういう授業の仕方は、当時の日本の教育の習慣にはない奇異なものでした。」そのころの日本のいなかの高等商業学校の授業の仕方は非常にペダンティックで、東京の大学で習ったようなことを先生がノートをとらせてむずかしいことを教えた。マッキンノン先生の授業の仕方は、学生たちから見るとどうも軽々

2) 同 403ページ

しい。それでだんだん先生を軽んじて、おしまいには先生の時間を逃げ（エスケープ）だしてしまふ。先生が腹を立てたようにして学校の前の坂道をとっとなととととと帰っていかれるのを、伊藤は見たことがある。しかしそういうことがあったにもかかわらず、非常にいい先生だということはみんな知っていた。ある時、英語の浜林生之助先生が「マッキンノン先生の授業を君たちはさぼるけれど、あの人はりっぱな方だ」と言った。³⁾ それ以来、さぼりは減った。

同僚の独身女性ミス・バグレーに生徒が、年齢はいくつだろうと言っているのを、「そのようなパーソナル・クエスチョンをするのは、日本人の欠点だ」と、マッキンノンはさとしたりした。⁴⁾

英語科の主任は、苦米地であって、彼と初代校長・渡辺、2代校長・伴とは、ウマがあった。⁵⁾

学校でマッキンノン先生の家を建てるというときに、自分が設計するとおりの家を建ててくださいといい、丸い円筒形の家を学校の費用で建ててもらった。屋根がとんがって円筒形の家だった。彼は、円筒はスペースが一番大きい、と言ひ、この家はたいへん画期的な、革命的な家だと、生徒に話した。

彼は日本を愛していたし、一家そろって日本びいきであった。彼は一時、乃木將軍を崇拜し、武士道精神に心酔した。外国人としては珍しく、勅任官待遇を受け、勲五等瑞宝賞も受けた。アメリカにいれば安楽に生活できたにちがいがなかったが、彼は最後まで日本に居たかった。

1923年、つまり第1次大戦後の軍縮問題の時期に、反米のデモが国中に起こり、小樽の町でも例外ではなかった。氏は、夫人と去就について相談し、滞日を決心したばかりであった。ある日、氏は教室に入ってきた。黒板に「We want no american teacher」と書かれてあった。氏は、率直に事情を学生に伝えた。学生の中の1人が進み出て、その文のあとに、「but one」と付け加えたのだった。

3) 伊藤

4) 佐藤稿、『緑丘』59, 11ページ

5) リチャード・マッキンノン講演, 1993年, 小樽商大, より。

以下述べるように第2次大戦で、先生はアメリカに送還されるのだった。大戦後、マッキンノン先生を日本に呼ぶ計画がたてられ、彼は2年間しぶったが、とうとう日本を訪問した。昔、豊浦中学で教えていた時、生徒が風邪をひいて休んだ。しばらく後、直ってまた学校にでてきた。その生徒は休んでいた間の報告を英語で書いて出した。その中に、owing to your kindness, I have recovered とか書いてあった。だが先生は、自分はその生徒に何もしてやることがない、見舞いにもいってない、なんにも kindness (親切) をしていないのに、どうして「おかげさま」というのだろうかと思って、日本語がいかにかわからない言葉かとおもっていた。だが、マッキンノンは日本に呼ばれ、勲三等瑞宝賞を貰い、その時、スピーチで彼は「自分は owing to your kindness という日本語が初めて今日わかった」と言った。⁶⁾

後の日米開戦(昭和16年12月)の前後には、マッキンノンは敵国人扱いされ、行動の自由を束縛された。小樽警察署の外事係が彼の尾行をした。

英会話の授業中だった。特高とおぼしき警官が突然、教室に入ってきて、先生の連行を求めた。彼は、二言、三言、はげしく抗議していた、「この手は陛下と三度も握手した手です」と言っても、警官は手に手錠をかけた。多分昭和天皇が皇太子時代に小樽高商を訪れた時にマッキンノンと握手したことであろう。やがて何を言っても無駄と悟った先生は、静かに本を閉じ、「グッド・バイ、シー・⁷⁾アゲイン」と言い残して、淋しく去って行った。こうして彼は授業中検束された。警察では暴行を受け、前歯を折られた。家財は差し押さえられた。スパイ容疑であった。もちろん警察のデッチあげである。逮捕は、学校はもちろん市民にとっても、大きなショックだった。昭和17年3月、彼はスパイ容疑で強制送還され、一家はちりじりバラバラになった。病弱なために1人日本に残された夫人は、その後、経済的にもどうしようもなくなった、そして亡くなった。⁴⁾ 息子リチャードは、小樽中学から金沢の第四高等学校へ進

6) 『伊藤整全集』 404-5 ページ

7) 「ユー・」が抜けているかもしれない。

んでいたが、退学させられた。彼はアメリカでは、世阿彌の研究で、ハーヴァード大学のドクターをとった。ワシントン州立大学の日本文学の教授をした。上の娘エリザベスは女子高等師範学校を、リンコナさんは津田英学塾を卒業している。当のマッキンノンは、渡米中の船で病気になり、その時親切に介抱してくれた女性と結婚した。

小樽では彼の事件は小林多喜二につぐ災難だったと言われた。

2 ニカライ・アレクサンドル・ニェフスキー

ロシアの著名な東洋学者となったニカライ・アレクサンドロヴィチ・ニェフスキーは、1892年にヤロスラーヴリ県ヤロスラヴリ市に生まれた。父は県内のポシェホニエ郡にある地方裁判所の予審判事であった。ニェフスキーが生まれて1年もたたないうちにすぐ母に死なれ、父は後妻を迎え、2人の女兒をもうけた。だがまた父にも死なれ、一家は四散した。彼は母方の祖父サスニンのもとに引き取られ、祖父母の住むルィビンスクで成長した。祖父は聖職者であって、教会の構内で生活した。だが祖父母にも死なれ、叔（伯）母に育てられた。彼はそれまで学校に入ったことはなかったが、1900年にルィビンスクの中学校に入り、1909年にそこを優等で卒業した。銀メダルを貰った。その間タタール語やアラビア語を学んだ。彼は東洋語学を学びたかったが、育ててくれた伯母の希望で、サンクト・ペテルブルグ工芸専門学校へ入った。1年学び、だが、そこを辞めて、1910年にペテルブルグ大学の東洋語学校へ入った。そこで中国語・日本語を選んだ。学友にコンラドがいた。そしてアレクセイエフ（1929年からアカデミー会員）やイワノフに教わった。日本語はクロノ・ヨシブミらに教わった。1913年に2カ月、日本にきて学んだ。主に東京で日本文学を研究した。1914年に、李白の詩についての卒業論文を出し、標題は「李白の詩一五篇について逐語訳と意識を行い、そこに見られる自然描写の絵画性を指摘し、さらにその数種の外国語訳に徹底的検討を加える試み」であった。

大学では日本語の正教授を養成する必要があったので、ネフスキーは教授候補者としてさらに勉学を続けることになった。しかし第1次大戦の勃発で、大学の予算が削られ、彼は無給になった。そこでエルミタージュ博物館に勤めた。⁸⁾

ニェフスキーは1915年に日本に留学した。2年間の日本留学期間に「国漢文学ならびに日本民俗学の研究」をした。⁹⁾

ニェフスキーは、柳田国男¹⁰⁾、折口信夫¹¹⁾、中山太郎らと親交を結んだ。彼の研究は神道であった。予定の留学期間が終るとき、1917年にロシア革命が起こり、ロシアからの留学資金の送金が停止した。彼は初め東大にいたが、生活のために、商社で働きもした。ロシア人ヴァシーリイ・メーロヴィチが経営する東京の明露壺商会である¹²⁾。彼は身体を壊し病気になるが、民俗学を学んだ。

大正7年には、「農業に関する血液の土俗」「遠路のまこない人形」「相模の獅子舞の歌」「あづないの罪」などを『土俗と伝説』に発表した。

大正7年に、前田光子との間に女兒・若子をもうけた。¹³⁾

1919年(大正八年)5月31日付けで、運よく小樽高商のロシア語教師になることができた。27才だった。ロシア語担当の教師田中乙が同年4月27日に亡くなったからであろう。亡くなってから1カ月後の採用であり、きわめて迅速である。

8) 『緑丘』57

9) 暮目, 『緑丘』59. 9ページ

10) 暮目, 同。

11) 柳田(1875-1962)。民俗学者, 兵庫県うまれ, 東大法科卒。青年時代詩人だった。役人になり, 大正8年退官。雑誌『郷土研究』『民族』などを主宰した。『定本柳田国男全集』全31巻 筑摩書房, あり。

12) 折口(1887, 明治20年-1953, 昭和28年)。民俗学者。歌人, 釈迢空。大阪出身。はじめ万葉学者。柳田の影響で古代を民俗学的に研究する。代表作『古代研究』。國學院大学教授, 慶応大学でも教える。

13) 暮目英三「小樽高商ロシア語教師 ニコライ・アンドロビッチ・ネフスキー氏(寝婦好)のこと(Nikolai A. Nevski)」『緑丘』52, 10-11ページ。ただし, ここでアンドロビッチは誤りだろう。

高商の渡辺校長の招きにふたつ返事で応じ、5月31日から勤務した。これには東京外語学校のロシア語教師ドゥシャン・トドロヴィチの尽力があった。¹⁴⁾ ニェフスキーは、光子、若子を伴わず、単身小樽へ赴いた。ただし当時の学生・金吉によると、ロシア語の授業は数カ月なかったと言う。¹⁵⁾

当時ニェフスキーは、日本語を日本人同様に流暢に話し、古典に通じ、数カ国語をマスターしていた、語学の天才であった。この年、週7時間の授業であった。2年生の初級クラスは8人で、授業中は日本語を全く使わず、説明は英語であった。教授法はベルリッツ法で、実物を使って教えた。「日本人の教授たちは、みんな明るい好人物ぞろい」と書いている。現代日本文学にも関心があった。1919年暮れに上京し、オシラ様の研究を柳田に勧められ、翌年すぐ、それを開始した。1920年の夏休みには、そのため東北調査旅行をした。彼は、柳田の『遠野物語』に注目して、遠野に旅行したこともあった。

彼は家では和服を着、角帯をし、足袋を履いていた。時折は妙見町界隈の花柳街にも姿を見せるという噂であった。緑2の28に住んだ。

初め、日本の古文調で会話をしていた。だが、大正9年、越崎がネフスキー先生のロシア語を選んでいる時には、日本人と変わらぬ流暢な日本語を話し、自由に漢字を書いた。彼は語学の天才で、数カ国語を自由に話した。越崎と同級の悪戯(いたずら)好きの学生が、先生の教室へ入って来る前に、黒板に「寝婦好」と書いておいた。先生は入ってくるなり、黒板掃きで、一語も発せず、消して、ニコニコと授業を初めた。¹⁶⁾ 「寝婦好」というのは彼のあだ名だと言う人がいるが、そうだとすれば、ここから出たのだ。

彼は休暇のたびに上京している。研究活動の必要でもあったが、光子と若子に会いたいための東京行きであったろう、と言われる。

越崎が「初めに官舎に訪ねた時には、顔にアザのある年輩の女中がいたが、

14) 桧山真一「ニコライ・ネフスキーと橘三千三」(『なろうど』28, 1994年3月) 4ページ, この資料は南里氏から提供を受けた。

15) 8ページ

16) 『緑丘』53, 18ページ

いつのまにか、この老婦人は居なくなって、代りに、マンドリンをひく、女中とも奥さんともつかね三十前後の女性が居るようになった。」¹⁷⁾ これは萬谷イソ（磯子）さんであろう。

ネフスキーは、東北のオシラ様や、性をシンボライズした石像の写真を、度々学生に見せた。越崎は当時、「変な先生だなあ」くらいにしか思わなかった。

大正九年の外語劇には、ロシア語劇「吝嗇なる武士」の演出にあたったネフスキー先生の熱の入れようは大したものであった。¹⁹⁾ 彼がプーシキンのこの作品を選定した。越崎が「その主人公をやらされた。平素は女人禁制の校舎も、外語劇の日だけは、学生の姉妹家族や下宿の娘にまで入場券が配られ、学生も張り切って演じた」。「爪に火をともしようにして金を貯めた老武士が、独り寂しくベッドで臨終の息を引取る幕切れで、今はの際にも金庫の鍵が気にかかり「鍵！」「鍵！」と二言叫んで息が絶えるのだが、ロシア語では鍵のことをクルウチュと云うので、私が最後に「クルウチュ！ クルウチュ！」とベッドの上で虚空を掴んで叫び、倒れるとチンプンカンプンのロシア語の中に日本語らしい「苦しい！苦しい！」と聞こえたのであろう。観客がドッと吹き出して、悲劇が喜劇になってしまった」。

「先生は、授業では実に厳しく、宿題などもたくさん課せられ、いつも尻をたたかれた。忘れ難い外人先生だった。」²⁰⁾

小樽時代のネフスキーの関心は、東北のオシラ信仰以外には、アイヌ語と宮古島方言であり、アイヌ語は金田一京助²¹⁾に教わったし、1922年2月にはアイヌ人からユーカラを聞いて筆記し、研究を始めた。

研究の助手として、彼は、同僚のドイツ人教師を介して、萬谷イソを採用した。まんに、あるいは、よろずや、と云う。小樽時代の後半らしい。彼女は

17) 越崎、『緑丘』59, 5ページ

19) 目黒「ネフスキー先生と親交を結ぶ」；越崎（『緑丘五〇年史』）；なお、『緑丘』No.60, 61, 62, 69, 72も見よ。

20) 越崎 45-46ページ

21) 金田一(1882-1971)。盛岡出身、東大卒。言語学者、国語学者。アイヌ語を研究する。主著『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』。啄木とも親交があった。

1901年、積丹(シャコタン)郡 入舸(いるか)村生まれで、網元の長女だった。萬谷家はその後衰退した。彼女は高等小学校を優等で卒業し、勤めてから、小樽に出て、外人教師のお手伝いをし、勉強していた。彼女は筑前琵琶をひいた。ネフスキーはイソと1921年7月ごろ深い仲になったと、加藤は推測する。²²⁾ 臺目は、彼が1921年に結婚したし、²³⁾ これは正式に神戸にあったソ連総領事館に登録されている、と書く。

彼は高商に3年間勤めた。第2外国語としてのロシア語を2年生と3年生に教えた。多喜二が第1学年を終る時、大正11年3月31日、ネフスキーは退職して、創立したばかりの大阪外国語学校へ転勤した。多喜二は1年生だったから、授業では教わらなかった。彼と多喜二とが高商で重なったのは、たった1年間である。またもしネフスキーが高商にいたとしても、多喜二が2年になってフランス語を選択するので、彼に教わることもなかったであろう。こうしてネフスキーと多喜二は授業では結び付かない。ただし廊下で会った時は会釈しあったであろう。少しは会話をしたかもしれない。しかし今のところまだ、交流の記録は残されていない。

ただし考えられる点は2つある。当時小樽高商では先生と学生は仲がよく、兄弟のようにつき合っていた。先生の家まで押し掛ける学生が多かった。こういう中では、いま想像できる以上の付き合いが2人の間であったかもしれないのである。加えて多喜二がロシア文学に興味を持っていたし、ネフスキーが日本文学に興味をもっていたので、それを話題にしてネフスキー先生と話をしたのではないか、という楽しい想像もある。²⁴⁾

臺目は、椎名幾三郎の談話を紹介する。ネフスキーは「仲々優秀な先生であった。掛軸のむづかしい字はすらすらと読むし、或る時上京する同じ汽車の中で何処に宿をとるか聞いたので品川の望水楼だといったら、その宿は海の側でなく山にあるのだろう、それなら望水楼でなく望翠楼だなど、非常に日本語に

22) 加藤九祚『天の蛇』河出書房新社 1976年、144ページ

23) 臺目「ニコライ・ネフスキーの生涯について(2)」『緑丘』60、8ページ

24) ソ連科学アカデミーのグロムコーフスカヤ女史の指摘。

通じた青年であった。ネフスキーを日本語で寝婦好などといっていたっけ。」

小樽の後、ネフスキーは、専任として大阪外語、講師として京都大学文学部でロシア語を教え、またアイヌ語の講義もした。ネフスキーが大阪へ行ったのは、関心の移行が原因ではないだろうか。東北のオシラ信仰、アイヌのユーカラの研究から、宮古島方言、西夏語研究にテーマが移っていった。宮古島には、大阪へ行ったすぐの夏から実地調査をしている。その後、台湾のツォウ（曹）族の言語などを実地調査し、日本語とロシア語で論文を発表した。

大阪へ行くとすぐ手紙を、実家に戻っていたイソへよこし、イソは大阪へ行くのであった。正式結婚は1929年であった。（加藤）²⁵⁾ 日本滞在中はどこでもネフスキーは刑事につきまともわれていた。ロシア人だからである。

夫妻は1928年、娘エレナ（愛称ネリ）をもうけた。大阪では石浜純太郎とともに西夏（タンゲート）学の研究を始めた。大阪外語では昭和4年8月まで勤務した。1927年に帰国の決心をした。1929年秋にニェフスキーは単身帰国し、レニングラード大学の日本学科で教え、西夏語の研究を続けた。1933年に妻と娘もソ連に渡った。

ニェフスキーとその恩師である中国学者アレクセエフとは親密であった。

ソ連では1934年、レニングラード党書記キーロフの暗殺事件²⁶⁾以降、粛清が始まった。粛清は、スターリンの独自の犯罪的・政治的計画である。

1937年10月4日夜、ニェフスキーは逮捕された。彼はアレクセエフ宅の一部を借りて住んでおり、まだ机について執筆中であった。彼は妻のイソに、「何かのまちがいと思うから心配するな、2時間くらいしたら帰ってくるから、机のものは動かさないでくれ」と言った。玄関で見送ったのは、イソ、エレナ、アレクセエフ夫妻の4人であった。みんな別れのキスを交わし、扉のところで振り返り、アレクセエフに「さよなら（プラシチャイチェ）」と言って、コート1枚を着て出て行った。だが、これが最後だった。

25) しかし前述の墓目説と違う。

26) もちろん、スターリンが殺させたのだ。

4日後にイソが逮捕された。彼女は娘のエレーナをあずけたいから、コンラード（著名な日本学者・中国学者）を呼んで欲しいと、係官に頼んだ。係官はコンラードを呼ぶ必要はない、娘は孤児院に入れる、と答えた。イソはここで失神して倒れた。係官はあわててコンラードを呼びに、そばにいた庭番を走らせた。

罪状は、ニェフスキーがレニングラードにおけるスパイの総元締であり、イソもその手先として、ソ連在住日本人の森とフワン・イワンを引き込み、日本人大使館の阿部という女性に情報を伝えているというものであった。

ニェフスキーが自分の罪状を知らされたのは、11月22日、銃殺の2日前であった。連日はげしい拷問が繰り返されたらしく、ニェフスキーはその調書に、くねくね曲がった字で認めるサインをしている。イソの方は断固として否認を続け、サインもしていない。²⁷⁾ エレーナはこれについて、「この強固さは民族的性格と強い夫婦愛に基づくものであろう」と書いている²⁸⁾。日本女性は強かった。

イソの逮捕後、数日して、日本語学者ホロドヴィチがやってきて、ニェフスキーの原稿や蔵書を整理した。ホロドヴィチは、かつてニェフスキー家にしばしば現れ、1934年にはヴォルガ下りも一緒にした親しい仲だった。エレーナは、カ・ゲ・ヴェ²⁹⁾（ママ）の秘密書類の中に、ホロドヴィチが内務人民委員部第三課の秘密工作員であったことを、最近見た。第3課は、ニェフスキー夫妻をはじめ、処刑された多くの中国学者、日本学者を直接担当していた。

夫妻は、無実の国家反逆罪を宣告され、同年11月24日、夫妻とも銃殺された。レニングラードのカ・ゲ・ベ本部で、計7人が銃殺された。そこからネヴァ河

27) 加藤九祚「悲運の東洋学者の最期」『朝日新聞』1992年4月6日夕刊

28) 同、加藤論説にある、エレーナの書いた「両親について」から。

29) ソ連内務人民委員部、つまり警察である。正確には、次のように名称が変化した。反革命・サボタージュ・投機と闘う非常委員会（チェ・カ）→国家保安部（ゲ・ペ・ウ）→合同国家保安部（オ・ゲ・ペ・ウ）→内務人民委員部（エヌ・カ・ヴェ・デ）→内務省（エム・ヴェ・デ）→国家保安省（エム・ゲ・ベ）→国家保安委員会（カ・ゲ・ベ）。

に大量の血が流れ込み、特別の船でその血を散らせたと、伝えられる。

コンラードは1938年7月29日逮捕され、8月13日の訊問で、ニェフスキー夫妻が日本のスパイであったこと、自らもスパイとして日本人上田、鳴海と連絡を保ったことを拷問によって認めさせられたが、1939年1月4日の訊問ではいっさい否認したとの書類も残っている。

1957年11月14日、白ロシア（現ベラルーシ）軍管区軍事法廷で、ニェフスキーらの無実が認められ、名誉回復がなされた。そして、『西夏文献学』2巻（1960年）などの業績に対し、1962年に出版科学部門のレーニン賞が授与された。イソの名誉回復は、1958年2月28日であった。1989年に娘エレナは日本を訪問した³⁰⁾。

3 大熊信行

大熊信行は、ちょうど多喜二が高商へ入学する時、高商に赴任した。多喜二は2年生になって大熊信行の経済原論の授業を受け、それから彼に個人的に近づいた。

大熊信行は、1893(明治26)年に山県県米沢市に生まれ、俳句・短歌を作った。1912年に東京高商の予科に入学し、1916年に本科を卒業した。3年後再び、東京高商の専攻部に入り、福田徳三に学んだ。多喜二が入学した大正十年に講師として赴任し、翌年教授となって、2、3年生の経済原論を担当した。丸2年半、高商で教えた。若い頃からの文学青年で、社会主義にも関心をもっていた。土岐善麿に傾倒し、短歌革新運動を志し、後に歌誌『まるめら』を出し、斎藤茂吉と論争をしたことがある。この少壮の特異な文人学者は、そういうわ

30) この時、小樽商大も訪れ、筆者も会った。；その他資料、天理図書館報「ビブリヤ」(昭和46年6月号)。岡崎精郎「ニコライ・A・ネフスキーの業績と生涯から」ニェフスキーの著述は最近、日本で出版された。『アイヌ・フォークロア』北海道出版企画センター
ロシア語では、ニェフスキーについて、Gromkovskaya 女史の2つの研究がある。

けで生徒に人気があった。多喜二もその魅力に引き寄せられた。

大熊は、赴任してすぐ、原書購読を担当した。第1学年AB組を担当し、多喜二を担当しなかった。CD組を担当したのは宮崎力蔵なので、多喜二は宮崎に原書購読を教わった。宮崎も大熊と同じ年に赴任した。

この年、大熊は学生とつき合ったなかで、親しかったのは、小林北一郎、伊藤治郎（筆名 青木三二）、清水宗兵衛であり、それ以外に、大泉行雄、土田秀雄である。彼らは多喜二より2年上である。

翌年早く、大西猪之介が急死した。一周忌追悼会で、他の教授と同様、大熊は追悼演説のため、演壇に立った。何か二言三言しゃべっていたが、急に無言になった、そして「ワーッ」と泣きだした。

大西の急死で、大熊は同1922年から経済原論を担当し、ここに多喜二が受講した。大熊は講義案に「労働の定義」を草する時、学会の通説に疑問を抱き、三週間休講して思索した。その結果、後に出す論文「生産力配分の原理」（昭和2年10月）のもとを考えついた。この年に、伊藤整が入学する。

整は書く。「私たちが授業時間になって合併教室に入っていくと、多喜二が教壇の机のそばで大熊氏と話し込んでいることが屢々あった。多喜二は小さい身体で、悪びれる風がなく大熊氏を見上げて居り、大熊氏は長身を折り曲げるようにして、その漆黒の髪の垂れ下がるのをかき上げながら、熱心に何か喋っている。それは前の授業の終わった時から続いている話で、一目で内容が推定されるようなことだった。つまり多分、それは革命とか、善悪の基準とか、文学の役割とかいう言葉が聯想されるような、真剣な対話であった。」³¹⁾

これに対して大熊は回顧する。「小林多喜二が講義のあとも合併教室に居残って、わたしと話しこんでいたという事実はあったとしても、しかし多喜二の質問は、おそらく講義の内容そのものに関するものだったのではあるまいか。わたしが原論をはじめて受けもった大正十一年という年には、十九歳の多喜二はまだ左にかたむいていないはずである。伊藤整が眼にとめた『真剣な対

31) 「小林多喜二の思い出」(『全集』)

話』の内容は、整の想像に反して、経済価値論の総合というような、おそろしく抽象的な問題だったのではないかと思う。わたしはその問題に憑かれていたのである。」³²⁾

伊藤は、自伝小説『若い詩人の肖像』では、もっと思い込みのあることを書く。「この年 [整が2年生になった年] 小林多喜二は、いよいよ自信ありげな顔をして、学校の中を歩いていて、私にはいつも気になる存在であった。ある時、・・・何かの講義を聞くために私たち2年生が [1年生でなければ、合わない] 合併教室に入ってゆくと、そのすぐ前の時間は、大熊信行が上級生のためにする経済原論か何かの時間に当たっていたらしく、教壇の上に大熊信行が赤らんだ長い顔を机の上に傾けて立っており、小林多喜二が壇の下にいて、彼の顎ぐらいの高さのその机に手をかけて、熱心に何かを尋ねている場面に出会った。

それは小林多喜二が最も熱心な生徒であるか、小林多喜二が特に大熊信行と仲がいいか、どちらかであった。前の事情であれば、彼は反マルクス主義的な思想を持っているらしい大熊信行を、マルクス主義について、問いつめているのであり、後の事情であれば小林はこの短歌や詩を作る [大熊は詩は作らなかった] 経済学の若手教授と二人教室に居残って、文学についての私談をしているのにちがいがなかった。いずれにしても、その様子は、私にねたましかった。」³³⁾

これに対して大熊は反論する。大熊がマルクス批判者だという世間の所説にたいして、そうではなかった、と彼は云う。それに、マルクス批判者だと云われはじめたのは、論文「マルクスのロビンソン物語」であって、昭和4年に『改造』にだされたものだ、と。そして、その論文でさえも、マルクス批判ではなかったと、大熊は云う。

また多喜二についても、大熊は云う。「ところで小林多喜二である。伊藤整

32) 大熊信行『文学的回想』第三文明社 1977年 209ページ

33) 『若い詩人の肖像』74-5ページ

の小説では、かれは高商時代から左翼的な文学青年であったような印象を受けられるけれども、わたしの知るかぎりそうではなかった」。³⁴⁾ ただし、大熊は少し修正はしている。「彼 [=多喜二] の卒業論文はクロポトキンの『パンの略取』の翻訳だとある以上、在学中から一つの傾向があったことは、改めてみとめなければならぬ。」と。

しかし、伊藤は、多喜二をマルクス主義者とすることで、自分の小説を面白くさせようとしている。

大熊は云う。一年の時、多喜二が自分の組にいなかったのに、かれが近づいて来たのは、どういう事情だったのだろうか。「わたしという奴が文学好きらしいという噂は、なんとなく伝わっていたのだろうか。」と自問する。多喜二とは「教室以外では、いつからの接触であったのか、・・・『文章倶楽部』に投稿した創作が当選し、その雑誌をみてくれとあって、近寄ってきたのが最初だったのではないかと思う。わたしの役目は、読むことであった。それも原稿ではなくて、なにかに載ったかれの短編を、つぎつぎに読まされた。かれはわたしの下宿にも来た。」³⁵⁾ 「わたしの下宿へ来たことも、たびたびあった・・・」

級友荻尾英彦は、「多喜二君と連れだって大熊先生を訪ねたこと。」³⁶⁾ と記している。2人で大熊の家へ行ったことがあった。

大熊は、自分の下宿でのことを思い出す。多喜二は「ある日、同年次の板垣武男と自然に落ち合った。いつのまにか二人は、はげしい論戦をはじめていた。夏目漱石の『文学論』はおもしろいか、おもしろくないか、というような議論である。」³⁷⁾ 「いわゆる水掛け論に終わったかと思われる。」³⁸⁾

ついでに大熊は、こう書いている。「板垣武男・小林多喜二などの同級には、

34) 大熊, 214ページ

35) 同, 203ページ

36) 緑丘大正十二年会編『坂の道』昭和48年 85ページ

37) 大熊, 203ページ

38) 同, 223ページ

佐々木重臣もいた。かれは自作の短歌を何十首もつらね、みってくれとってもってきた。当時、きわだって歌作に熱心だった学生が、佐々木である。・・・のちに『まるめら』同人の佐々木妙二である。³⁹⁾ ただし佐々木は後に、多喜二が高商で1年上だった、と云っているから、妙である。一年休学したかもしれない。

手塚は書く。多喜二は、「制服を着たり、ときには粗末な和服の着流しで、真冬でも足袋をはかず、懐を書物でふくらましせたりしながら通学していたが、彼は学校の内外、教員の一人一人に人間として何んでもまともにぶつかるという態度であった。」「教師のなかでは、大熊信行ともっとも親しかった。」⁴⁰⁾

これにたいして大熊はどう思っていたか。「わたしが小林多喜二を好いたのには、十分な理由がある。かれには文学青年臭といったものが、いささかもなかったということ。当時の小樽高商には、そういった意味で、鼻持ちのならないグループもあった。しかし多喜二は、かれらとは無縁であった。いつもかれは、こざっぱりしたふうをしていたから、貧しいという感じを与えるはずもなかった。真冬に素足でいたのは、いわば土地の風習であって、貧乏のせいとは思えなかった。」⁴¹⁾

その上、大熊は、肉親の1人に多喜二がよく似ていたので、最初から親しみの情がわいた。「小林多喜二は、こざっぱりして、気どりがなく、よく白い歯をむいて笑いながら話す、明るい気分の青年だった。」⁴²⁾ 「かれほど話しながら笑顔の絶えない人もめずらしかった。」⁴³⁾

大熊が一番はっきり思い出すのは、多喜二の「中途退場」である。一度だけ、経済原論の講義の最中、多喜二は突然席を立ったとみると、大熊の教壇の前を

39) 同, 203ページ

40) 手塚, 79ページ

41) 大熊, 221ページ

42) 同, 215ページ

43) 同, 223ページ

ユウユウと横切って、おまけに首を転じて合併教室の全員を見渡しながらか、そのまま教室の外へ中途退場したことがあった。「こんなことでもおれはできるのだ、どんなもんだ」といわんばかりであった。もちろん、あとにも先にも一回かぎりの、突っ飛な行動であった。

大熊は、大正12年の春には病をえて、6月に米沢に帰省し、絶対安静の生活に入った。だから手塚が言うように、「三年後の三月、ちょうど多喜二の卒業年度に、彼もまたこの学校を去っていった」とするのは、誤りである。学校の記録の上だけのことである。経過としては、彼は4月ごろから微熱がでて、高商の校医は肺病(=結核)の診断を下さなかった。北海道大学病院でもそうだった。それで大熊は、自己診断で、学校をやめた。

大熊信行の授業を安宅文雄氏も受けたが、「素晴らしい授業であり、学生との親密さも多分にあった。」⁴⁴⁾しかし、多喜二の次の年、安宅や伊藤整の受けた年は、2・3カ月しか講義をしていない。

大熊本人は書く。「厳密にいうと、履歴上の退官は大正一四年四月である。しかし小樽における実際の在任期間は、大正十年四月から一二年六月までの二年と三カ月にすぎない。」⁴⁵⁾

そのたった2、3カ月の講義について、伊藤は書く。「大熊信行は私の学校の若い教授で、経済原論を教えていた。私たちはテキストとして[ジョン・スチュアート・ミル⁴⁶⁾の『プリンシプル・オヴ・ポリティカル・エコノミイ』という紺表紙の分厚い原書を買ひ、合併教室で、彼の講義を聞いた。……大熊信行は、その頃二十七八歳に見え、胸が悪いので独身でいるのだという噂であった。」⁴⁷⁾この噂は当たらない、と大熊は云う。

「彼は合の長いオーバーを着て、学校の坂を登り、また下る時に、ゆっく

44) 小生あて安宅先生の手紙。

45) 大熊、190-191ページ

46) ジョン・スチュアート・ミル(1806-1873)。イギリスの経済学者。古典派経済学の完成者とされる。経済学では主著『経済学原理』。その研究として、チェルヌイシェフスキー『J. S. ミル「経済学原理」への評解』岩波書店。

47) 『肖像』43ページ

りと歩いた。そのオーヴァーは大変ゆったりと作られていて、彼が歩く度にその裾が大きく揺れた。その特別仕立らしいオーヴァーの揺れかたが、彼にダンディーという印象を与えた。」大熊はしかしこれは、イギリス仕立てのバーバリーだった、と言う。

「教室で彼はテキストの上にその紅潮した顔を傾け、クセのない黒い長い髪が前に垂れ下がるのを絶えず左手でかき上げながら、福島辺の訛のある言葉で喋り、英語の文章を講義した。彼の教えるミルの英文は、極端に理詰めにてできていて、近代の産業では分業がどのような過程で生産を増大するか、そして分業と機械による生産方式がいかに熟練工を作り、その熟練を増し、手工業時代と全く違った近代の工場組織を作り出すか、それが社会の将来にいかなる光明をもたらすものか、ということ、近代産業の上昇期の理論家に特有の、明るい判断で述べたものであった。関係代名詞を能率的に使ったその論文の構造の明晰さが、私のウブな理解力に沁み込んだ。私はそのテキストによって、社会の経済的構造の原理を、一小部分ではあるが、忘れがたい確かさで理解した。」⁴⁸⁾

整は、また書く。「大熊信行がこの田舎の高等商業学校の教授という地位に満足している人間でないらしいのを、」整は知っていた、と書く。しかし、大熊は、「わたし自身は当時の地位に満足していた」⁴⁹⁾と否定している。

4 伴 房次郎

伴房次郎は、明治7年(1874)京都市伏見区の生まれで、次男である。京都府尋常中学校を卒業し、明治30年7月に、金沢の第四高等学校を卒業し、京都で法科に入ろうとしたが、京都帝大の法科は開設が遅れ、明治31年9月、東京帝国大学法科大学英法科に入学した。京都大学では法科が明治32年に開設された。学生時代に、簡単明瞭な答案を書くので、教授たちに有名であった。明

48) 『肖像』44ページ

49) 199ページ

治35年7月に卒業した。当時、東大は7月卒業だったのである。伴は銀時計を貰った。つまり成績がトップであった。

同年8月、伴は、京都帝国大学法科大学の講師となった。翌年助教授になり、明治45年9月に小樽高商の教授として赴任した。その直前の数年間は、ヨーロッパ諸国へ在外研究員として民法研究のために留学した。初め3年間、その後また延長した。つまり明治41年8月から明治45年6月までであった。⁵⁰⁾ 京大時代には民法の研究が中心で、ドイツの参考文献を使って民法の論文を書いていた。

伴は、小樽高商に来てからは研究論文はほとんど書かなかった。もちろんそれだからと言って、もうろくしているとは言われなかった。彼は研究ではなく教育にかけたのではないかと推定される。伴は書いている。「学者か先生か、此問題は、高商の学問上の地位から来るので、世と共に推移する間に自然に解決するのであらう。」⁵¹⁾ (読点を補う。) こうして彼は「学者」でなく「先生」になった。

また、なぜ京都帝大から小樽へ来たのかも不思議なことである。彼は京都大学の教授にもなれたはずである。小樽行きは、それを止めた形になるからである。京都大学の助教授で、生まれが京都の人が、当時辺籬だとされた小樽へ来るのは、不思議である。実際、伴の小樽赴任のとき、小樽では大変な評判になった。これは渡辺校長の懇請によるとされている。渡辺が伴に、次の校長になってもらいたいと、もちかけたのではないか。しかし伴は出世主義者ではないから、なお不思議である。渡辺の誘いがきわめてうまかったのかもしれない。

渡辺は外国留学中、同じく留学中でドイツにいた伴に会い、小樽行きを願ったとされる。伴本人は留学の時、「小樽高商へ赴任の事は当時既に内命を受けていた」と書く。⁵²⁾ ここははっきりしないが、「内命」とあれば、文部省から

50) 伴房次郎先生書簡集(下)『緑丘』74号の年譜

51) 伴「瓢然録」(『緑丘』83号) 3ページ

52) 同

の内命である。つづいて伴は書く。「明治42, 3年頃, 当時ベルリン在留中の自分に宛て, 面会を申し込む書面が渡辺氏より来た。其渡辺氏の名前がどうしても自分にはわからない。」⁵³⁾ 小樽高商の校長になる人だということが, 問い合わせから, わかった。11月3日の天長節の日に, 伴は渡辺を訪問した, と。

伴はまず小樽で, 旧友(河原直孝, 小樽市長をしたことがある)の家に寄寓した。単身赴任であった。授業の相手は中等学校を出たばかりの学生なので, 初めは教壇にたって, 困った。法律の思想を吹き込むには時間が余りにも少ないからだった。「結局は時間を無駄にせぬ様, 興味も失はせぬ様, 法律が日常生活に織り込まれて居る事を示して其常識ともいふべきものを授ける外なしと考へた。」(読点を加えた——筆者)⁵⁴⁾ 当時は講義は筆記だった。伴は講義がうまいと言われた。⁵⁵⁾ わかりやすかった。実は, 彼は教授法も研究したのだった。そしてそれは, 上述の考えにもよったのであろう。伴は, 赤いネクタイと大きな鞆で有名であった。不思議なことに, 彼は京都時代に講述著書(『契約法各論』出版社・年, 不詳)を出しただけで, 小樽時代には本を出さなかった。彼は温厚篤実であった。彼はよく, 「先生は生徒に親切なれ」と書いた。

伴の法律の講義は非常に面白かったとして, 大正6年卒業の伊東が例をあげている。それは, 筆記の合い間の雑談だった。伴いわく。「左甚五郎が梅干のタネに彫刻を施した。立派な彫刻となった。梅干のタネは, その所有権は, 梅干を食べた人にあらずして, 左甚五郎に帰するのである。第一次世界戦争に於いて, 日本は青島を攻略占領した。青島はその所有権は, 支那に非ずして, 莫大なる投資を施した独乙の所有権に帰す, 斯る国際私法を適応して, 青島は日本の占拠となった。」⁵⁶⁾ (句読点を補った。)ここで筆者は, 伴を非難するつもりはない。しかし梅干と青島を同一視するとは, 帝国主義的である。教師の中でも, 伴は立派な方であった, と推測される。その伴にしてそうなのだから,

53) 伴「瓢然録」(『緑丘』83号) 4ページ

54) 伴「瓢然録」3ページ

55) 大平の稿『緑丘』77・78号 10ページ

56) 伊東の稿『緑丘』79号 7ページ

当時のインテリの認識の程が解る。

伴は、小樽高商でまず10年間教授をした。筆頭教授とも言われ、教頭だったとも言われる。大正7年入学の管野は、「教頭の伴さんの名声が遥かに校長を凌いでいる」と書いた。先輩が彼に教えた、「何か困ったことがあれば伴さんそこへ行け、帰りは春風駘蕩たる気持ちで帰れる」と。⁵⁷⁾

それから伴は大正10年に第2代校長となり、とりわけ大正12年に木部が赴任してからは、伴は正規の授業は担当しなかった。

彼はよくこんなことを言った。「私の学生への念願は、社会に出てよく他校出身者に見受ける所謂”高商出”の嫌味を身につけない様に、そして誠実にしてヴァリエティのある人間に成長して貰いたい事だ」。⁵⁸⁾

小樽高商軍事教練事件(1924年)の発生後まもなく、伴先生が、学生を一室に集めて諄々とさとした中に、「小樽高商は今黒雲に覆れているが、この黒雲をとりのぞく者は、校長でも教授でもない、君達の力である」と言った。

昭和10年3月に突然、文部大臣・松田源治から、伴校長に至急上京せよとの連絡が有り、伴校長がその時直感したのは、渡辺校長が在職10年、自分も十年余やって来たので、さては辞職勧告かと考えて、上京したらしい。正しくその通りで、大臣から、「君も小樽の校長を十年余やってきたので、こころで桂冠してもらいたい」と言い出されたので、伴校長も残念だったらしいが、納得するより他なかった。大臣は、永い間の伴の苦勞を謝し、「時に、次の校長の件であるが」と、今度は相談ずくで言い出した。「他の専門学校の任命は何でもないが、小樽は特別の誰でもいいとはいかない、本省でも色々考慮したのだが、次の校長には苦米地君になって貰う積もりであるが、どうか？」と、伴校長に意見を求めた。⁵⁹⁾

当時、筆頭教授は中村和之雄であった。文部大臣は、中村が文学士であって、普通の高等学校では彼がなるべきだが、苦米地が専門なので、彼になってもら

57) 『緑丘』52, 7ページ

58) 小貫の稿, 同 79号 9ページ

59) 神部の稿『緑丘』77・78号 30-31ページ

いたかったわけであった。

13年間の校長時代が終わって⁶⁰⁾、伴は東京へ行って、隠退した。伴は簡素な生活に満足していた。彼はいつも葉書に小さい字で書くので、知られていた。1956（昭和31）年に亡くなった。⁶¹⁾

5 ルイス・フーゴー・フランク

ルイス・フーゴー・フランクは、1886年6月2日、ドイツのライプチヒに生まれた。ユダヤ系であった。その後、ルール地方エッセンの実科高等学校に入学した。1904年にベルリン大学に入学し、化学を学んだ。彼の師は、後にノーベル賞を授賞するネルンストであって、フランクは1909年に学位＝博士号を優等でとった。博士論文は「Pyrrolidin 誘導体について」であった。その後、ベルリン大学で講義助教となっていた。1912年に英国人アミー・ルーシー・フィッシャーと結婚した。2人共、東洋に関心があった。

1913年に、渡辺校長の招きで、小樽高商に着任した。日本のお雇い外国人のうちドイツ人は37%であり、一番多いのである。⁶²⁾ 高商では、商品学・商品実験の講師となった。小樽で商品学の開拓者であった。⁶³⁾ 当時の『小樽新聞』はいう。ルイス・ヒュゴー・フランク氏は「髪も黒く眼も日本人に近い。ナポ

60) 伴が辞めさせられたのは、軍教事件のせいではないかと、一ツ橋大学・松田先生は推測している。

61) 伴房次郎先生書簡集（中）『緑丘』73号あり。伴手紙集上もある。

『小樽高商二代校長 伴房次郎先生書簡集』（「緑丘」編集部 昭和46年）あり。

62) 保延（ほのべ）誠先生は、次の作品で、フランク先生の、特に山梨時代そして、長男の悲劇について、実に立派な調べをしている。それは、真の国際親善に供するものである。つまり長男フーゴーの無実を明かにし、フランク家の恨みを晴らしたのである。『The Centenary Book of Dr. Louis Hugo Frank, Edited by Makoto Honobe. ルイス・フーゴ・フランク先生生誕百念記念誌。』保延誠編、山梨大学工学部内 ルイス・フーゴ・フランク先生追悼謝恩会 1993年5月。本項は、この調べ、および小樽商科大学での保延講話（1993年）によって書いている。

63) 参考) 石井澄男「故フランク先生の生誕百念記念に寄せて」（山梨工業会 山梨大学工学部内 『山梨工業会会報』63号 昭和61年10月）

レオンに似た所がある、・・・渡辺校長が躍起となっている商品実験科の顧問として、同科の命運を開拓し真価を發揮すべき重大な期待を背負って立つ・・・篤実の学者でいつも実験室で熱心に研究しており、夫人はうら若い美人」(現代風に表現した)と。⁶⁴⁾ フランクは、初め緑町の官舎に住んだ。契約は初めは3年であった。そしてその後何回か更新したのだった。「小樽高等商業学校長渡辺龍聖とルイ・ヒューゴー・フランクとの間に於て」締結した契約によれば、「第1條 大正2年4月1日(1913年4月1日)以降満三箇年間小樽高等商業学校に於て商品学及商品実験の教師として」雇用する。「第2條・・・本国より日本小樽に至る間の旅費として金975円を受領」する。「第3條・・・俸給として毎月末に1カ月金400円及び手当50円」⁶⁵⁾ とある(原文はカタカナそして漢数字)。彼は、英語で化学の講義をし、英語で試験をした。答案を英語で書くので、学生は和英辞典が持込み可だった。彼はドイツ語なまりの英語を話した。しかし皮肉にも、逆に学生には分かりはよかった。

着任後1年で、第1次大戦が始まってしまい、彼は敵国人となった。

1914年の『小樽新聞』には、辛らつな記事が出ている。「一体外人教師は、これを邦人教官に比して俸給の法外に高ただけの利益が直接に学生に報いられるものじゃない。極言すれば床の間の掛軸であり、置物である。座敷を調える為には無くて済まぬけれども結局贅沢品である。・・・邦人教官なら、同じ俸給で第一流の学者を少なくとも5、6人は」雇える。「尤外人教師は高等出稼だからと云ってしまえばそれまでだ。」

小林多喜二もフランク先生に教わった。

フランクは、石鹼工場設立の原動力になった。後に魚油脱臭法の特許を出している。魚油を石鹼材料にしたのであり、小樽では魚油が多かった。鯧魚のお蔭である。⁶⁶⁾

「緑丘 [=小樽高商の] 特色の一 [つ]、渡辺初代校長の策とはいえ、実際

64) 『小樽新聞』1914年

65) 契約書。小樽商科大学蔵。

66) 鎌倉の稿、『緑丘』新68号

上は日本に創始の商品学，商品実験の生みの親，ここから後年理学博士小原亀太郎先生も生れ，西田彰三，品川秀三教授，小瀬伊俊教授もあった，それから石鹼工場を実験室とする原価計算，労務管理，工場経営の研究と実践も，こうして生まれた・・・」⁶⁷⁾

1915年，長男フーゴー・カール・フランクが小樽で生まれた。1917年には，次男ルーディが小樽で生まれた。1922年ころ，家族は水天宮の近くの相生町に移った。1922年，高商を訪れた皇太子（=昭和天皇）は，彼と握手した。その後，1924年，フランクは，2人の子供の教育のために，相生町から札幌北14条東1丁目に転居した。そして2人の兄弟は札幌で教育された。

1926年に彼は，13年勤めた小樽高商を去って，山梨高等工業学校に着任した。前年の大正14年にこの学校は開校していた。フランクは子どもの教育のため，関東・横浜に近い山梨に行ったのだった。彼は講師として，電気化学，電気材料，ドイツ語を担当した。長男フーゴーは1939年，日本女性ちずか（=Alice）と結婚した。

時代は臨戦体制になり，当局の監視が強まってきた。フランクは，在日ナチス秘密警察の隊長ヨーゼフ・マジンガーの策動により，1942年（=昭和17年）1月1日に，ユダヤ系であるとの理由で，ナチスによりドイツ国籍を剥奪された。そして1943年に山梨の学校を事実上解任された。山梨は17年の勤務であった。彼ら家族はまず，横浜に行き，1944年に長男一家は箱根に，他は軽井沢の戦時収容所に行った。

長男フーゴーは，1944年7月28日に横浜憲兵隊に逮捕され，共同スパイ行為としてデッチあげられ，横浜憲兵隊で3カ月拷問にあって，無実の自白書に署名を強要された。箱根で外国友人とお喋りしていたからである。1945年に懲役5年の判決を受け，服役中の1945年6月30日に病死した，実際は栄養失調であった。彼の墓碑は，軽井沢外人墓地にある。

フランクたちは戦後，横浜に住み，アメリカ占領軍の軍学校 Army School

67) 大谷の稿，『緑丘』61号

で教えた。次男が先に渡米してから、フランクは1949年に渡米した。アーカンソー州リトル・ロック市のフィランダー・スミス・カレッジで教えた。1973年10月8日に、彼はサンフランシスコで亡くなった。

1979年には、夫人が亡くなった。1986年に彼のかつての勤務校、山梨大学にフランク先生の記念碑が立った。

6 ジョー・アルベール・デーゲン

デーゲンは、スイス出身のスイス人であり、高商ではドイツ語とフランス語の会話を教えた。英語で教えた。フランス語よりドイツ語の方が選択した学生が多かった。多喜二も彼にフランス語を教わった。デーゲンは、学生に一様に親切で、授業も熱心だった。快男児だった。学生も彼を敬愛していた。親しい学生とは余市の林檎畑やその他にピクニックに行った。

小林多喜二は彼にフランス語を教わった。デーゲンは、高商の外語劇の指導もした。

彼はピアノが上手で、一度、有料でピアノ独奏の会をし、ベートーヴェンの「月光の曲」を弾いた。ピアノはまだ珍しいころで、小樽でもあまりなかった。この曲の全曲演奏は小樽で初めてだったのではないかとされている。⁶⁸⁾

「北海屋ホテルの下宿に訪ねてさえくれば、ビールを嫌程飲まして、ドイツ大学生の様子を満喫させてやる」と言い、相当学生は行ったらしい。⁶⁹⁾美しく仲睦まじい夫人がいた。

ワンマンで有名な苦米地と意見を異にして、彼は高商を去り、タイ(当時シャム)へ行った。終戦後、アメリカへ行った。⁷⁰⁾

ここに紹介した4人のうち3人の外国人教師は、多かれ少なかれ、ヒトラー、

68) 『坂の道』

69) 菅野(すがの)の稿、同、59、15ページ

70) 油の稿、同 59。17ページ

スターリン、ヒロヒトのファシズムの犠牲である。

訂 正

前稿「小樽高等商業学校と渡辺龍聖」(『商学討究』第44巻第4号 1994年3月)
でミスプリがあった。

		誤	正
69ページ	最終行	伝訳	伝記
93ページ	8行	破門	波紋
同	9行	適中	適中 (ママ, ただしの中が正しい)